

## 正方分割表における対称性の尺度と累積確率の対称性

山田 章史 (東京理科大学大学院・理工学研究科)  
山本 紘司 (東京理科大学大学院・理工学研究科)  
田畑 耕治 (東京理科大学・理工学部)  
富澤 貞男 (東京理科大学・理工学部)

### 第1部：正方分割表における対称性の尺度

行と列が同じ分類からなる正方分割表において, Tomizawa, Seo and Yamamoto (1998) は対称モデル (Bowker, 1948) からの隔たりを測る尺度  $\phi^{(\lambda)}$  を提案した. 尺度  $\phi^{(\lambda)}$  は, 0 以上 1 以下の値をとり, (i) 任意の対称的な 2 つのセル確率のどちらか一方が 0 であるときに, 対称モデルからの隔たりは最大 (すなわち  $\phi^{(\lambda)} = 1$ ) であり, (ii) 対称モデルが成り立つときに最小 (すなわち  $\phi^{(\lambda)} = 0$ ) になるという性質を持つ. しかし, 実際のデータ解析では, 多くの場合に各セル確率は 0 ではないため, 尺度  $\phi^{(\lambda)}$  は 1 に到達出来ない. そこで, 本報告では各セル確率が 0 でないときでも尺度の値が 1 に到達出来るような尺度を提案した.

正方  $R \times R$  分割表において,  $(i, j)$  セル確率を  $p_{ij}$  とする ( $i = 1, \dots, R; j = 1, \dots, R$ ). 対称モデルは次のように定義される (Bowker, 1948):

$$p_{ij} = p_{ji} \quad (i \neq j).$$

すべての  $i \neq j$  に対して,  $1 - d \leq p_{ij}^c \leq d$  を満たす定数  $d$  ( $0.5 < d \leq 1$ ) を与えて, 対称モデルからの隔たりを測る尺度を次のように導入した:

$$\Phi^{(\lambda)}(d) = \frac{1}{C^{(\lambda)}(d)} \phi^{(\lambda)} \quad (\lambda > -1),$$

ただし,

$$C^{(\lambda)}(d) = 1 - \frac{\lambda 2^\lambda}{2^\lambda - 1} H^{(\lambda)}(d), \quad H^{(\lambda)}(d) = \frac{1}{\lambda} [1 - d^{\lambda+1} - (1 - d)^{\lambda+1}].$$

ここに  $\Phi^{(0)}(d) = \lim_{\lambda \rightarrow 0} \Phi^{(\lambda)}(d)$ . 尺度  $\Phi^{(\lambda)}(d)$  は  $0 \leq \Phi^{(\lambda)}(d) \leq 1$  を満たし, 任意の  $\lambda > -1$  に対して, (i) 対称モデルが成り立つための必要十分条件は  $\Phi^{(\lambda)}(d) = 0$  であり, (ii) 対称モデルからの隔たりが最大 [ $i < j$  に対して,  $p_{ij}^c = 1 - d$  (このとき  $p_{ji}^c = d$ ) または  $p_{ji}^c = 1 - d$  (このとき  $p_{ij}^c = d$ ) のときと定義] であるための必要十分条件は  $\Phi^{(\lambda)}(d) = 1$  である.

さらに, 尺度の近似信頼区間や実データへの適用例を示し, 提案した尺度の有用性を示した.

## 第2部：正方分割表における累積確率に基づく対称性に関するモデル

行と列が順序のある同じ分類からなる  $R \times R$  正方分割表において， $(i, j)$  セル確率を  $p_{ij}$  とする ( $i = 1, \dots, R; j = 1, \dots, R$ )．累積確率  $\{G_{ij}\}$ ， $i \neq j$ ，を

$$G_{ij} = \sum_{s=1}^i \sum_{t=j}^R p_{st} \quad (i < j), \quad G_{ij} = \sum_{s=i}^R \sum_{t=1}^j p_{st} \quad (i > j),$$

のように定義する．本報告では，対称的な累積確率の対数オッズが，分割表の主対角線からの距離に関する多項式で表されるモデル（Cモデル）を次のように考えた： $0 \leq k_1 < k_2 < \dots < k_m \leq R-2$  ( $1 \leq m \leq R-1$ ) に対して，

$$\log G_{ij} = \begin{cases} \Delta_{j-i} + \Psi_{ij} & (i < j), \\ \Psi_{ij} & (i > j), \end{cases} \quad \log p_{ii} = \Psi_{ii},$$

ただし，

$$\Delta_{j-i} = \sum_{t=1}^m (j-i)^{k_t} \Theta_{k_t}, \quad \Psi_{ij} = \Psi_{ji}.$$

(Tomizawa, Miyamoto and Yamamoto, 2006; Yamamoto and Tomizawa, 2008)．

さらに，累積確率の和をとったものを定義し，これに基づいた新たなモデルを導入することで，Cモデルに関する分解定理を得た．加えて，新たに提案したモデルやモデルの分解定理の有用性を，実データを用いた応用例とともに示した．

## 参考文献

- Bowker, A. H. (1948). A test for symmetry in contingency tables. *Journal of the American Statistical Association*, **43**, 572-574.
- Tomizawa, S., Miyamoto, N. and Yamamoto, K. (2006). Decomposition for polynomial cumulative symmetry model in square contingency tables with ordered categories. *Metron: International Journal of Statistics*, **64**, 303-314.
- Tomizawa, S., Seo, T. and Yamamoto, H. (1998). Power-divergence-type measure of departure from symmetry for square contingency tables that have nominal categories. *Journal of Applied Statistics*, **25**, 387-398.
- Yamamoto, K. and Tomizawa, S. (2008). A generalization of cumulative symmetry models and its decomposition for square contingency tables with ordered categories. *Far East Journal of Theoretical Statistics*, **24**, 201-211.